

各中・高等学校の外国語教育における
「CAN-DO リスト」の形での
学習到達目標設定のための手引き

平成25年3月

文部科学省初等中等教育局

はじめに

平成 23 年 6 月に「外国語能力の向上に関する検討会」（平成 22 年 11 月 5 日初等中等教育局長決定）がとりまとめた「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策」において、各中・高等学校が学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で具体的に設定することについて提言がなされました。

これを踏まえ、文部科学省においては、「外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定に関する検討会議」（以下、「検討会議」）を設置し、検討を重ねてきました。

本手引きは、検討会議における議論をとりまとめ、各学校において、学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定し、活用するにあたっての参考としていただくよう、作成したものです。

本手引きは、新学習指導要領の着実な実施にも資するものです。各学校におかれましては、指導と評価の改善に向けた取組に活用していただきたいと思えます。

最後に、本手引きの策定にあたり御協力いただきました検討会議の委員の皆様、データ提供等に御協力いただきました関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

文部科学省初等中等教育局長

布 村 幸 彦

各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での
学習到達目標設定のための手引き

【目 次】

1. 各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での 学習到達目標設定フローチャート	1
2. 本文	3
・趣旨・目的	3
・「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の設定手順	5
・活用方法	9
・設定した目標の達成度を把握するための評価方法及び評価時期	12
・達成状況の把握，設定した学習到達目標の見直し	14
3. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標例（中学校学習指導要領に おける外国語科の目標に基づく設定例）及び年間指導計画・単元 計画への反映例	16
4. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標例（高等学校学習指導要領 における外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの 設定例）及び年間指導計画・単元計画への反映例	19
5. Q&A	23

(参考資料)

1. 外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠	41
2. 外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定 に関する検討会議（平成24年7月19日初等中等教育局長決定）	45
3. 外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定 に関する検討会議委員名簿	46

各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定
フローチャート

1 〈目的〉

- ・学習指導要領に基づき、観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、主に教員が生徒の指導と評価の改善に活用すること。

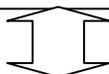
〈検討体制〉

- ・学習到達目標の設定過程に外国語担当教員等全員が参加し、管理職の理解や協力、リーダーシップのもと、言語を用いて何ができるようになることを目指すかという観点から、生徒の実態を踏まえた上で、育成したい能力や生徒像、学習指導要領に基づいた指導と評価の方法を共有する体制を構築。



2 〈卒業時の学習到達目標設定〉※

- ・生徒の学習の状況や地域の実態等を踏まえた上で、卒業時の学習到達目標を、言語を用いて「～することができる」という形で設定。(その際、学習指導要領上の目標等に基づくことが必要。)



3 〈学年ごとの学習到達目標の設定及び年間指導計画と単元計画への反映〉※
(16～22 ページ参照)

〈学年ごとの学習到達目標設定〉

- ・卒業時の学習到達目標を達成するための学年ごとの目標を、「CAN-DO リスト」の形で設定。(必要に応じて、学習指導要領や既存の取組を参照。)

〈年間の指導と評価の計画への反映〉

- ・「CAN-DO リスト」の形で設定した学年ごとの学習到達目標を年間指導計画等に位置づけ。各単元における目標、主な学習活動、評価方法等を計画



〈単元ごとの指導と評価の計画への反映〉

- ・各学校で実際に行われる学習活動を基に、各単元の目標及び評価規準を設定。
- ・教科書を中心に、単元の目標を達成するのに適した教材を活用した各時の学習指導を計画。
- ・目標の達成状況を把握するための具体的な評価を計画し、単元計画に位置づける。

※ 2及び3が相互に対応したものとなるよう調整

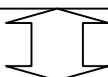


授業の実施

4 〈授業と評価〉

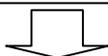
- ・ 言語を用いて何ができるようになるかという観点から計画した授業を実施。！単元の目標や評価規準を意識して授業を実施することが重要！
- ・ 観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、評価の計画に従い、学習活動の特質等に応じて、生徒の学習状況を的確に評価できる方法で実施。
評価方法例：多肢選択形式等の筆記テストのみならず、面接，エッセー，スピーチ等のパフォーマンス評価，観察等
- ・ 単元等の区切りの中で適切に設定した時期において評価。さらに学期や学年といった単位で学習の実現状況をまとめる。

(注) 観点別学習状況の評価においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」及び「言語や文化についての知識・理解」の観点を併せて評価する。



5 〈達成状況の把握〉

各単元の目標や学年ごとの学習到達目標の達成状況を把握し、指導や評価の改善に生かす。必要に応じて教科書の採択に生かす。



6 〈学習到達目標の見直し〉

設定した卒業時及び学年ごとの学習到達目標が適切であったかどうかを検討し、必要に応じて見直す。



2 〈学習到達目標の設定〉に戻る

各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き 本文

1. 趣旨・目的

英語をはじめとした外国語は、グローバル社会を生きる我が国の子どもたちの可能性を大きく広げる上で重要なものであるとともに、日本の国際競争力を高めていく上での重要な要素となっている。平成23年6月に「外国語能力の向上に関する検討会」（平成22年11月5日初等中等教育局長決定）がとりまとめた「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」においては、以下のとおり、学習指導要領に基づき、各中・高等学校が生徒に求められる英語力を達成するための目標（学習到達目標）を「言語を用いて何ができるか」という観点から、「CAN-DO リスト」の形で具体的に設定することについて提言がなされたところである。

「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」（抜粋）

提言1. 生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証する。

（前略）多くの学校では、学習指導要領に基づく授業が行われている一方、一部の学校では、文法・訳読中心の授業、高校入試や大学入試の対策に特化した授業などが行われているとの指摘がある。中・高等学校では、各学校が、学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で具体的に設定することにより、学習指導要領の内容を踏まえた指導方法や評価方法の工夫・改善が容易になる。また、各学校が、学習指導要領の目標を地域の実態や生徒の能力に応じて具体的な目標に設定し直すことにより、すべての子どもたちの英語力の水準向上に資するだけでなく、グローバル社会に通用するより高度な英語力の習得を目指すことも可能となる。

（中略）

<具体的施策>

○中・高等学校は、学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定・公表するとともに、その達成状況を把握する。国や教育委員会は、各学校が学習到達目標を設定・活用する際に参考となる情報を提供するなど、必要な支援を行う。

各学校が「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標（以下、「CAN-DO リスト形式の目標」）を設定する目的は、第一に、外国語能力向上のために、生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、教員が生徒の指導と評価の改善に活用することである。

英語をはじめとした外国語が使える日本人を育成するためには、学習指導要領に基づく授業を着実に実施するとともに、その成果を把握することが不可欠である。また、指導と評価の一体化を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、更には学校における教育活動を組織として改善することが重要である。CAN-DO リスト形式の目標を設定するにあたっては、外国語科における観点別学習状況の評価のうち、特に「外国語表現の能

力」及び「外国語理解の能力」の観点からの評価に活用することにより、外国語教育の指導と評価の改善につながる効果が期待できる。

第二に、学習到達目標を、言語を用いて「～することができる」という能力記述文の形で設定することにより、学習指導要領を踏まえた、4技能を有機的に結び付け、総合的に育成する指導につながることである。

我が国における外国語教育の課題として、一部の学校において、文法事項の解説や訳読が指導の中心となっており、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能の総合的な指導が行われていない場合があることや、学習指導計画が何月に教科書の何ページを教えるかといった、時間軸に沿った教科書使用に関するものにとどまっている場合があることなどが指摘されている。指導の見直しにより、外国語を用いて円滑にコミュニケーションを図る能力や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりするなどの適切に伝える能力、更には思考力・判断力・表現力を養うことが期待できる。教科書についてもそのような観点から取り扱い、「教科書を教える」のではなく、目標を達成するために「教科書で教える」ことが重要である。

第三に、教員と生徒が外国語学習の目標を共有することである。これにより、生徒自身にも、言語を用いて、「～ができるようになりたい」、「～ができるようになることを目指す」といった自覚が芽生え、言語習得に必要な自律的学習者としての態度・姿勢が身に付くとともに、「言語を用いて～ができるようになった」という達成感による学習意欲の更なる向上にもつながることが期待される。もとより、教室においてある特定の言語活動ができるようになることと、実生活でも使えるような語学力が長期的に見て身に付いていることとは必ずしも同じでない場合はある。しかし、自律的学習者としての態度や姿勢が身に付くと、学校を卒業した後も、自らに必要な言語能力の習得を続けることがより容易になると考えられる。

〈「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定する目的〉

- 学習指導要領に基づき、外国語科の観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、主に教員が生徒の指導と評価の改善に活用すること
- 学習指導要領を踏まえた、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能を総合的に育成し、外国語によるコミュニケーション能力、相手の文化的、社会的背景を踏まえた上で自らの考えを適切に伝える能力並びに思考力・判断力・表現力を養う指導につなげること
- 生涯学習の観点から、教員が生徒と目標を共有することにより、言語習得に必要な自律的学習者として主体的に学習する態度・姿勢を生徒が身に付けること

2. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標の設定手順

(1) 検討体制

CAN-DO リスト形式の目標の設定にあたっては、設定過程に外国語科担当教員や可能であれば外国語指導助手（ALT）等、外国語教育に携わる者全員が参加し、生徒が言語を用いて何ができるようになることを目指すかという観点から、生徒の実態を踏まえた上で、育成したい能力や生徒像、学習指導要領に基づいた指導と評価の方法を共有することが必要である。この取組が円滑に進むためには、管理職の理解や協力、リーダーシップの発揮などが期待される。

また、目標を設定した後も、実際の授業における言語活動の計画や言語活動を効果的に行うための教材の準備等について、外国語科担当教員等全員が協力するとともに、互いの授業の参観等を通じて、指導方法や評価方法等を共有し続けることが望まれる。

〈検討体制〉

- 学習到達目標の設定過程に外国語担当教員等全員が参加し、管理職の理解や協力、リーダーシップのもと、言語を用いて何ができるようになることを目指すかという観点から、生徒の実態を踏まえた上で、育成したい能力や生徒像、学習指導要領に基づいた指導と評価の方法を共有する体制を構築する。

(2) 学習到達目標の設定

(学習到達目標の意味)

学習到達目標とは、各学校において、全ての生徒に求められる外国語能力を達成するためのものである。

その上で、目標を超えた伸長がみられる生徒については、更にその先を見通すことができ、学習意欲を維持できるような工夫が必要である。例えば、可能であれば、通常の学習活動をより発展、拡充させた内容の活動に取り組むことなどが考えられる。

他方、習熟により時間がかかる生徒については、学習意欲を維持し、確実に学習を続けることができるような工夫が必要である。例えば、目標に到達しつつある過程を教員が適切に評価することによって、生徒の更なる学習を支援する工夫が必要である。

(卒業時の学習到達目標の設定)

生徒の学習の状況や地域の実態等を踏まえた上で、卒業時の学習到達目標を、言語を用いて「～することができる」という形で設定し、卒業までに生徒が身に付ける能力の全体像を描くことが重要である。卒業時の学習到達目標を設定するにあたって、入学時の生徒の実態を踏まえるためには、例えば、入学時に生徒による簡単な自己評価¹を実施することや、入学前の小学校や中学校での学習状況を把握することなどが考えられる。卒業時の学習到達目標は、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づいたものとするとともに、各学校や生徒の状況を踏まえたものとする必要がある。

(学年ごとの学習到達目標の設定)

卒業時の学習到達目標を達成するため、各学年段階における指導や評価に資するよう、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの目標として、4技能を用いて「～することができる」という形（「CAN-DO リスト」の形）で設定することが望ましい。その際、例えば、能力記述文の書き方や各目標の難易度に基づいた配置について、全体的な能力発達段階を示している「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（CEFR）」や CEFR を踏まえた国内における取組、外部検定試験の実施団体が開発した「CAN-DO リスト」等を参照することが可能である。既存の取組を参照するなどにより、学年の進行に応じて学習到達目標も生徒の発達段階に応じたものとなるように作成することが重要である。

ただし、既存の取組を参照する場合であっても、各学校や在籍する生徒の

¹ 13 ページ「4. 設定した目標の達成度を把握するための評価方法及び評価時期（生徒による自己評価）」参照

実態に応じた分かりやすいものを作成し、指導や評価に活用する中で、設定した目標が生徒の実態に合うものとなるよう、適切な時期に見直すことが重要である（詳細は「5. 達成状況の把握，設定した学習到達目標の見直し」参照）。

なお、高等学校においては、単位制を併用していること、外国語科の科目の開設状況が各学校により異なることに留意しつつ、外国語科全体の目標を踏まえ、学年ごとの区切りの中で学習到達目標を設定することが望ましいと考えられる。

（能力記述文の作成）

本手引きにおける学習到達目標は、「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」について、4技能を用いて何ができるようになるかを「～することができる」という具体的な文（能力記述文）によって表すものである。能力記述文は、以下の要件を備えていることが望ましい。

- ・ ある言語の具体的な使用場面における言語活動を表している。
- ・ 学習活動の一環として行う言語活動であり、各学校が適切な評価方法を用いて評価できる。²

なお、中学校及び高等学校学習指導要領では、次に示すような言語の使用場面や言語の働きが取り上げられており、高等学校においては、これらの中から、外国語科の各科目の目標を達成するのにふさわしいものを適宜、有機的に組み合わせて活用することとされている。能力記述文の作成においては、これらの言語の使用場面や言語の働きを参照することが可能である。

特に高等学校では、生徒が英語³に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とするが、こうした言語の使用場面や言語の働きを取り上げて言語活動を行うことにより、英語で授業を行うことが可能となる。

〔言語の使用場面の例〕

- a. 特有の表現がよく使われる場面：
 - ・ 自己紹介（中）
 - ・ 手紙や電子メールでのやりとり（高）など
- b. 生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面：
 - ・ 学校での学習や活動（中高） など
- c. 多様な手段を通じて情報などを得る場面（高）：

² 12 ページ「4. 設定した目標の達成度を把握するための評価方法及び評価時期（評価方法）」参照

³ その他の外国語についても英語に準ずるものである。

- ・本，新聞，雑誌などを読むこと など

[言語の働きの例]

- a. コミュニケーションを円滑にする：
- ・呼びかける（中） ・相づちを打つ（中高） ・聞き直す（中高）
 - ・繰り返す（中高） ・言い換える（高）
 - ・話題を発展させる（高） ・話題を変える（高） など
- b. 気持ちを伝える：
- ・礼を言う（中） ・苦情を言う（中）
 - ・褒める（中高） ・謝る（中高） ・感謝する（高）
 - ・望む（高） ・驚く（高） ・心配する（高） など
- c. 情報を伝える：
- ・発表する（中） ・説明する（中高） ・報告する（中高）
 - ・描写する（中高） ・理由を述べる（高） ・要約する（高）
 - ・訂正する（高） など
- d. 考えや意図を伝える：
- ・約束する（中） ・意見を言う（中） ・承諾する（中）
 - ・断る（中）
 - ・申し出る（中高） ・賛成する（中高） ・反対する（中高）
 - ・主張する（高） ・推論する（高） ・仮定する（高） など
- e. 相手の行動を促す：
- ・質問する（中） ・招待する（中）
 - ・依頼する（中高） ・誘う（高） ・許可する（高）
 - ・助言する（高） ・命令する（高） ・注意を引く（高） など

学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標における能力記述文の内容については、あまり細かくすると、それをより具体的に反映させる年間指導計画及び単元計画の作成が難しくなり、それを実際に指導し評価する場面や適切な教材を用意することが困難となることも考えられる。したがって、能力記述文の具体性は、学習指導要領で示されている外国語科及び外国語科の各科目の内容における表現の程度にしておくと、年間指導計画や単元計画と適切に関連付けることが可能になると考えられる。

〈学習到達目標の意味〉

学習到達目標とは、各学校において、全ての生徒に求められる外国語能力を達成するためのものである。その上で、目標を超えた伸長がみられる生徒も、習熟により時間がかかる生徒も、学習意欲を維持できるような工夫が必要である。

〈卒業時の学習到達目標の設定〉

生徒の学習の状況や地域の実態等を踏まえた上で、卒業時の学習到達目標を、言語を用いて「～することができる」という形で設定する。

〈学年ごとの学習到達目標の設定〉

卒業時の学習到達目標を達成するため、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの目標について、4技能を用いて「～することができる」の形（「CAN-DO リスト」の形）で設定する。

3. 活用方法（16～22 ページ 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例参照）

（1）年間の指導と評価の計画への反映

CAN-DO リスト形式の目標を年間指導計画にどのように位置付け、どのような指導を行うか、また、設定した目標の達成度をどのように把握し、評価するかについて計画することにより、CAN-DO リスト形式の目標と年間指導計画とを有機的に連動させることが重要である。そのため、遅くとも年度当初の授業開始前までに、CAN-DO リスト形式の目標の設定と並行して年間指導計画を策定し、各単元における目標、学習活動、評価方法等を計画することが必要である。

各単元における指導計画は教科書の内容と密接に関連するが、教科書において扱われている言語材料⁴がどのような力を伸ばすことに適しているかを判断しつつ指導計画を作成し、その中に CAN-DO リスト形式の目標を位置付けることが重要である。

CAN-DO リスト形式の目標に基づく評価の前提として、学習評価については、学習指導要領に示す外国語科の目標（高等学校については、学習指導要領に示す外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づき、学校が地域や生徒の実態に即して定めた当該外国語科及び外国語科の各科目の目標や内容）⁵に照らして、

⁴ 言語材料とは音声、文字及び符号、語、連語及び慣用表現、文法事項、文構造のうち、運用度の高いものを指す。

⁵ 「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要

その実現状況の評価を着実に実施することが求められている。別紙に示すとおり、観点別学習状況の評価における外国語科の評価の観点は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」及び「言語や文化についての知識・理解」とされているが、このうち CAN-DO リスト形式の目標設定に適しているのは、「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」であると考えられる。

また、高等学校の場合は、CAN-DO リスト形式の目標と外国語科の各科目の指導計画とを有機的に関連付けることが重要である。そのためにも、外国語科担当教員等全員がこの点について共通理解を持つておくことが必要である。

さらに、生徒や保護者と学習到達目標を共有するため、CAN-DO リスト形式の目標を、例えば、高等学校におけるシラバスなどにも反映させることが望ましい。

なお、可能であれば、教室の中で行った言語活動を実践する機会を学校が生徒に提供することも学習意欲の向上につながる。例えば、[言語の使用場面]における「電子メールでのやりとり」や、[言語の働き]における「考えや意図を伝える」という項目を取り上げる際に、併せて、姉妹校等との電子メールによる情報交換や情報通信技術を利用したプレゼンテーションやディベート等の交流活動を行うことが考えられる。さらに、教員自らが外国語を実際に使用する姿勢を示すとともに、生徒が、例えば地域の国際交流活動に参加するなど、教室外でも外国語を使用することを奨励することも重要である。

録の改善等について（通知）（平成 22 年 5 月 11 日）」の別紙 2Ⅱ1(1)及び別紙 3Ⅱ1(1)参照

〈年間の指導と評価の計画への反映〉（16～22 ページ 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例参照）

- CAN-DO リスト形式の目標を年間指導計画にどのように位置付け、どのような指導を行うか、また、設定した目標の達成度をどのような方法で把握し、評価するかを計画する。
- その際、観点別学習状況の評価における外国語科の評価の観点は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」及び「言語や文化についての知識・理解」とされているが、CAN-DO リスト形式の目標設定に適しているのは、このうち「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」になる。
- 高等学校の場合は、CAN-DO リスト形式の目標と外国語科の各科目の指導計画とを有機的に関連付けることが重要である。そのためにも、外国語科担当教員等全員が学習到達目標の当該科目における指導への反映について共通理解を持っておくことが必要である。
- 生徒や保護者と学習到達目標を共有するため、CAN-DO リスト形式の目標を、例えば、高等学校におけるシラバスなどにも反映させることが望ましい。

（2）単元⁶計画への反映（各授業内容、教科書などの教材との関係）

CAN-DO リスト形式の目標を単元ごとの指導と評価の計画に反映するにあたっては、各学校で実際に行われている学習活動を、「言語を用いて何ができるようになるか」という観点から見直した上で、それを基に単元ごとの目標及び評価規準⁷を設定する必要がある。実際に行われている学習活動が、例えば4技能の総合的な指導と必ずしもなっていない場合などには、指導方法や学習活動の改善が必要となる。

⁶ 本手引きにおける単元とは、学習活動における一連のまとまりであり、外国語科においては例えば教科書の1つの課、あるいは教科書の複数の課をまとめて扱う場合はそれら複数の課をひとまとまりとしたもの、などが想定される。

⁷ 評価規準とは、設定した目標について、生徒がどのような学習状況を実現すればよいのかを具体的に想定したものである。評価規準は観点ごとに設定し、「おおむね満足できる」状況を示している。

授業においては、教科書を中心として、教員の創意工夫により、単元の目標を達成するのに適した教材を活用しながら各時の学習指導を計画することが必要である。実際の授業を行う際も、常に単元の目標や評価規準を意識することが重要である。

また、目標の達成状況を把握するための具体的な評価の場面及び方法を計画し、単元計画に位置付け、指導と評価の一体化を図ることが必要である。

〈単元計画への反映〉

- 各学校で実際に行われる学習活動を基に各単元の目標及び評価規準を設定し、これらを意識して授業を実施することが重要である。
- 教科書を中心に、単元の目標を達成するのに適した教材を活用した各時の学習指導を計画する。
- 目標の達成状況を把握するための具体的な評価を計画し、単元計画に位置付ける。

以上のように、卒業時の学習到達目標、学年ごとの学習到達目標、年間指導計画及び単元計画が相互に関連したものとなるよう調整することが重要である。

4. 設定した目標の達成度を把握するための評価方法及び評価時期

評価は、目標に沿った学習活動を適切に評価できる方法及び時期を選択した上で実施される必要があり、指導と深く関わるものである。したがって、CAN-DO リスト形式の目標を年間指導計画等に位置付けることにより、CAN-DO リスト形式の目標と評価規準、評価方法及び評価時期とを有機的に結びつけることが重要である。

(評価方法)

CAN-DO リスト形式の目標は、観点別学習状況の評価のうち、「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」の評価について活用するのに適していると考えられる。その際、学習到達目標に対応した学習活動の特質等に応じて、多肢選択形式等の筆記テストのみならず、面接、エッセー、スピーチ等のパフォー

マンス評価⁸、活動の観察等、様々な評価方法の中からその場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択することが重要である。

なお、観点別学習状況の評価においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」及び「言語や文化についての知識・理解」の観点を併せて評価することとなる。

CAN-DO リスト形式の目標に準拠した評価を行うにあたっては、各学校が適切な評価方法を用いて実施する必要があるが、例えば外部検定試験等を外部指標として補足的に活用することも可能である。その際、その外部検定試験が何を測定しているのかを把握した上で活用することが重要であり、外部検定試験の受験結果そのものが目標となるべきではない点に留意することが必要である。また、外部検定試験の結果によって評定につながる評価をすることはできないことにも留意が必要である。

（評価時期）

授業改善のための評価は日常的に行われることが重要である一方で、生徒の学習の実現状況を記録するための評価を行う際には、単元等のある程度長い区切りの中で適切に設定した時期において評価することが求められる。その上で学期や学年といった単位で学習の実現状況を総括することが必要である。

（生徒による自己評価）

教員による評価とは別に、CAN-DO リスト形式の目標を生徒と共有し、生徒による自己評価に活用することも可能である。これにより、生徒自身の学習の振り返りにつながり、自分の外国語能力を客観的に捉えることで外国語学習への意欲が向上したり、自信が持てたりする効果が期待できる。その際、CAN-DO リスト形式の目標を生徒に分かりやすく書き下した自己評価表を作成することも考えられる。

また、教員にとっても、生徒の自己評価を自身の評価と照らし合わせることにより、指導の振り返りにつながるとともに、学習到達目標を見直す際にも有益な参考資料となると考えられる。ただし、生徒による自己評価の結果を教員が行う生徒の評価資料として使うことはできないことに留意が必要である。

⁸ パフォーマンス評価の例としては、国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 外国語）」（平成 23 年 11 月）の事例 4、及び「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 外国語）」（平成 24 年 3 月）の事例を参照

- 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を年間指導計画等に位置付けることにより、「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標と評価規準、評価方法及び評価時期を有機的に連動させることが重要である。
(16～22 ページ「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例参照)

〈評価方法〉

- 観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、学習到達目標に対応した学習活動の特質等に応じて、多肢選択形式等の筆記テストのみならず、面接、エッセー、スピーチ等のパフォーマンス評価、活動の観察等、様々な評価方法の中からその場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択することが重要である。

〈評価時期〉

- 授業改善のための評価は日常的に行われることが重要である一方で、生徒の学習の実現状況を記録するための評価を行う際には、単元等のある程度長い区切りの中で適切に設定した時期において評価することが求められる。さらに、学期や学年といった単位で学習の実現状況を総括する。

5. 達成状況の把握，設定した学習到達目標の見直し

外国語科担当教員等が全員で各単元の目標や学年ごとの学習到達目標の達成状況を把握し、必要に応じて指導方法を改善するとともに、評価の妥当性及び信頼性を高める視点から、評価の方法を適宜見直す必要がある。また、これらの指導や評価の見直しを踏まえ、教科書の採択に生かすことも重要である。

さらに、卒業時及び学年ごとの目標が適切なものであったかどうかを検討し、必要に応じて、設定した目標の内容や難易度を見直すといった PDCA サイクルを確立することが重要である。

見直しの時期としては、学年末が望ましい。もし学年の途中で見直す場合には、生徒や保護者へも周知する必要があるため、どのような場合に見直しを行うのかについてあらかじめ整理しておく必要がある。

〈達成状況の把握〉

- 外国語科担当教員等が全員で各単元の目標や学年ごとの学習到達目標の達成状況を把握し、必要に応じて指導方法を改善する必要がある。また、評価の妥当性及び信頼性を高める視点から、評価の方法を適宜見直す。さらに、指導や評価の見直しを踏まえ、教科書の採択に生かす。

〈設定した学習到達目標の見直し〉

- 設定した目標が適切なものであったかどうかを検討し、必要に応じて、目標の内容や難易度を見直すといった PDCA サイクルを確立する。
- 見直しの時期としては、学年末が望ましい。

「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標例（中学校学習指導要領における外国語科の目標に基づく設定例）

及び年間指導計画・単元計画への反映例

- ※ 観点別学習状況の評価における「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」、「外国語文化についての知識・理解」の4つの観点のうち、「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」について設定する。ただし、学習評価は4つの観点を総合して行う。
- ※ 本学習到達目標例は技能別例に示してあるが、授業においては、4技能の総合的な指導を通して、4技能を統合的に活用できるように留意する。
- ※ 平成10年に改訂された中学校学習指導要領及び現行学習指導要領においては、従来と異なり各学年ごとの目標は立てず、3学年間を通じて目指すべき目標が示されている。これは各学校が生徒の学習の実態に応じて学年ごとの目標を設定することが適切と考えられたからである。したがって、高等学校用の例示と異なり、本例示においては、学年ごとの学習到達目標の全体は示していない。

初歩的な英語で話したり書いたりして自分の考えなどを表現するとともに、初歩的な英語を聞いたり読んだりして話し手や書き手の意向などを理解することができる。

「外国語表現の能力」

「外国語理解の能力」

【第3学年】

話すこと	書くこと	聞くこと	読むこと	評価
学習到達目標 ・〇〇することができる。 ・△△することができる。 ...	学習到達目標 ・〇〇することができる。 ・△△することができる。 ...	学習到達目標 ・〇〇することができる。 ・△△することができる。 ...	学習到達目標 ・ある程度の長さの物語を読んで、登場人物の行動や話の流れなど、あらすじを読み取ることができる。 ...	評価 ・□□ ・◎◎ ...

【第2学年】

話すこと	書くこと	聞くこと	読むこと	評価
学習到達目標 ・〇〇することができる。 ・△△することができる。 ...	学習到達目標 ・〇〇することができる。 ・△△することができる。 ...	学習到達目標 ・〇〇することができる。 ・△△することができる。 ...	学習到達目標 ・簡単な物語について、話の展開を読み取ることができる。 ...	評価 ・□□ ・◎◎ ...

【第1学年】

話すこと		書くこと		聞くこと		読むこと	
学習到達目標	評価	学習到達目標	評価	学習到達目標	評価	学習到達目標	評価
<ul style="list-style-type: none"> 〇〇することができる。 △△することができる。 ... 	<ul style="list-style-type: none"> □□ ◎◎ ... 	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇することができる。 △△することができる。 ... 	<ul style="list-style-type: none"> □□ ◎◎ ... 	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇することができる。 △△することができる。 ... 	<ul style="list-style-type: none"> □□ ◎◎ ... 	<ul style="list-style-type: none"> 短い話について、大まかな流れを読み取ることができる。 ... 	<ul style="list-style-type: none"> □□ ◎◎ ...

年間指導計画への反映

第 3 学 年		第 3 学 年	
単元 (配当時間)	題材内容	単元の目標	単元の評価規準
Lesson 〇 A Red Ribbon (6時間)	原爆投下後の広島で両親を押し歩いて疲弊した少女ルミが、やがて発症して息を引き取っていく話。	<ul style="list-style-type: none"> (本単元では設定しない) (本単元では設定しない) 	<ul style="list-style-type: none"> 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」 音読練習をする(リピート、バズ・リディング、ペア・リーディング等)。
			<ul style="list-style-type: none"> 「外国語表現の能力」 前時に読んだ内容を、時の流れを示す表現を頼りにして、ペアで再話(retelling)する。
			<ul style="list-style-type: none"> 「外国語理解の能力」
		<ul style="list-style-type: none"> ・時間軸に沿って物語のあらすじを読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本文を黙読し、いつ、誰が、何をしたのかについて大まかな内容を読み取る。 ・本文を時の流れに沿ってパート分けする。 ・時間軸に沿って、主人公ルミの様子と筆者の気持ちや行動を、時間軸と内容を併記できるプリント(本単元全体を一覧のできるもので、以下の時間でも使用する)にまとめる。
		<ul style="list-style-type: none"> (本単元では設定しない) 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書とは異なる物語を読み筆記テストにおいて、時の流れを示す表現などを頼りにしながら全体のあらすじを読み取るができるかどうかをチェックし、判断する。
		<ul style="list-style-type: none"> (本単元では設定しない) 	<ul style="list-style-type: none"> 「言語や文化についての知識・理解」 教科書本文から時の流れを示す表現を抜き出す。

単元 配当時間	Lesson ○ A Red Ribbon 6 時間		評価方法
単元 の 目 標	1. 時間軸に沿って物語のあらすじを読み取る。		
単元 の 評 価 規 準	「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」 (本単元では評価しない)	「外国語表現の能力」 (本単元では評価しない)	評価規準①
	「外国語理解の能力」 ① 時間軸に沿って物語のあらすじを読み取ることができる。 (本単元では評価しない)	「言語や文化についての知識・理解」 (本単元では評価しない)	評価規準①
時 間	ねらい	学習活動	評価方法
1	本単元で身に付ける技能 や理解する内容を知る。 時間軸に沿ってあらすじ を読み取る。	1. Warm-up として、教師が生徒と広島や原爆に関するやりとりをする。 2. 教科書本文 (Section 1 及び 2) を読む前に、タイトルや挿絵から内容を推測する。 3. 本文を黙読し、あらすじのつかみ方として、何が話題で、いつ、どこで、誰が、何をしたのかについて大まかな内容を読み取る。 4. 本文を時の流れに沿ってパート分けする。 5. 時の流れを示す表現を抜き出し、時間軸に沿って主人公ルミの様子と筆者の気持ちや行動を、時間軸と内容を併記できるプリント (本単元全体を一覧にできるもので、以下の時間でも使用する) にまとめる。	筆記テスト (後日)
2	語句の意味を確認し音読 する。	1. 単語、連語等の意味や発音を確認する。 2. 音読練習をする (リビート、バズ・リーディング、ペア・リーディング等)。 3. 前時に読んだ内容を、時の流れを示す表現を頼りにして、ペアで再話 (retelling) する。	
3	時間軸に沿ってあらすじ を読み取る。	1. 教科書本文 (Section 3 及び 4) を読む前に、挿絵から内容を推測する。 2. 本文を黙読し、いつ、誰が、何をしたのかについて大まかな内容を読み取る。 3. 本文を時の流れに沿ってパート分けする。 4. 時の流れを示す表現を抜き出し、時間軸に沿ってルミの様子と筆者の気持ちや行動を並べて整理する。	筆記テスト (後日)
4	語句の意味を確認し音読 する。	1. 単語、連語等の意味や発音を確認する。 2. 音読練習をする (リビート、バズ・リーディング、ペア・リーディング等)。 3. 前時に読んだ内容を、時の流れを示す表現を頼りにして、ペアで再話 (retelling) する。	
5	時間軸に沿って別の物語 のあらすじを読み取る。	1. 教科書の本文全体について、挿絵と時の流れを示す表現を頼りにして黙読し、文章全体の内容理解を再確認する。 2. この話を通して筆者が伝えたいメッセージを考える。 3. 教科書とは別の同じような時間軸で構成された物語文を用いて、あらすじをつかむ練習をする。 4. 時の流れを示す表現を頼りにして、時間軸に沿って起こった出来事を整理できたか確認する。	筆記テスト (後日)
6	(筆記テスト)	1. 教科書とは異なる物語を讀む筆記テストにおいて、時の流れを示す表現などを頼りにしながら全体のあらすじを読み取る。	評価規準① 筆記テスト (後日)

「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標例（高等学校学習指導要領における外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの設定例）

及び年間指導計画・単元計画への反映例

- ※ 観点別学習状況の評価における「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」及び「言語や文化についての知識・理解」の4つの観点のうち、「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」について設定する。ただし、学習評価は4つの観点を総合して行う。
- ※ 本学習到達目標例は技能別IIに示してあるが、授業においては、4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成することに留意する。

【卒業時】

英語を通じて、場面や状況、背景、相手の表情や反応などを踏まえて、話し手や書き手の伝えたいことを的確に理解するとともに、自分が伝えたいことを適切に伝えることができる。

「外国語表現の能力」

「外国語理解の能力」

【第3学年】履修科目：「コミュニケーション英語Ⅲ」（4単位）及び「英語表現Ⅱ」（分割2単位）／主な教材：左記科目の教科書、教科書の内容に関連した別教材

話すこと	書くこと	聞くこと	読むこと	科目・評価	科目・評価	科目・評価	科目・評価
<p>学習到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞いたことを読み取ったこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表することができる。 ・発表されたものを聞いて、質問したり意見を述べたりすることができる。 ・多様な考え方ができる話題について、立場を決めて意見をまとめ、相手を説得するために意見を述べ合うことができる。 	<p>学習到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主題を決め、様々な種類の文章を書くことができる。 ・文章の構成を考えながら書くことができる。 ・図表との関連を考えながら書くことができる。 ・書いた内容を読み返して、推敲することができる。 	<p>学習到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的な話題や時事問題について話されている対話や討論などを聞いて、情報や考えなどの概要をとらえることができる。 ・社会的な話題や時事問題について話されている対話や討論などを聞いて、情報や考えなどの要点や詳細をとらえることができる。 	<p>学習到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的な話題や時事問題について書かれている説明や評論などを速読して、情報や考えなどの概要をとらえることができる。 ・社会的な話題や時事問題について書かれている説明や評論などを精読して、情報や考えなどの要点や詳細をとらえることができる。 	<p>科目・評価</p> <ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション英語Ⅲ ライティングテスト グテスト ・定期考査 	<p>科目・評価</p> <ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション英語Ⅲ リスニングテスト ・定期考査 	<p>科目・評価</p> <ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション英語Ⅲ ライティングテスト グテスト ・定期考査 	<p>科目・評価</p> <ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション英語Ⅲ ライティングテスト グテスト ・定期考査

【第2学年】履修科目：「コミュニケーション英語Ⅱ」（4単位）及び「英語表現Ⅱ」（分割2単位）／主な教材：左記科目の教科書、教科書の内容に関連した別教材

話すこと	書くこと	聞くこと	読むこと	科目・評価	科目・評価	科目・評価	科目・評価
<p>学習到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞いたことを読み取ったこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめることができる。 ・英語の音声的な特徴や内容の展開などに注意しながら話すことができる。 ・説明や描写の表現を工夫して、相手に効果的に伝えるように話すことができる。 ・与えられた条件に合わせて、即興で 	<p>学習到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞いたことを読み取ったこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、まとまりのある文章を書くことができる。 ・論点や根拠などを明確にしながらかくことができる。 ・説明や描写の表現を工夫して、相手に効果的に伝えるように書くことができる。 	<p>学習到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどの概要をとらえることができる。 ・事物に関する紹介や報告、対話や討論などに注意しながら聞くことができる。 ・未知の語の意味を推測したり背景と 	<p>学習到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・説明、評論、物語、随筆などを速読して、概要をとらえることができる。 ・説明、評論、物語、随筆などを精読して、要点や詳細をとらえることができる。 ・説明、評論、物語、随筆などを聞き手に伝わるように音読したり暗唱したりすることができる。 ・文章の構成を考えながら読むことができる。 ・図表との関連を考えながら読むこと 	<p>科目・評価</p> <ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション英語Ⅱ ライティングテスト グテスト ・定期考査 	<p>科目・評価</p> <ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション英語Ⅱ リスニングテスト グテスト ・定期考査 	<p>科目・評価</p> <ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション英語Ⅱ リスニングテスト グテスト ・定期考査 	<p>科目・評価</p> <ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション英語Ⅱ ライティングテスト グテスト ・定期考査

			「言語や文化についての知識・理解」		・自分の考えや気持ち伝える表現 (hope [that] S+V ~など) の使い方を理解している。 ・自分の考えや気持ち伝える表現 (hope [that] S+V ~など) の使用を確認する。 ・本文中で用いられている意味や用法を認識した筆記テストにおいて、知識が身に付いているかを判断する。
--	--	--	-------------------	--	--

単元計画への反映

単元	Lesson 〇	配当時間	単元の目標	単元の評価規準	時間	ねらい	学習活動	評価規準	評価方法
1	8時間		1. ペア・ワークにおいて、互いに協力しながら会話を続ける。 2. 人物についての説明を読んで、その内容を口頭で要約する。 3. 読んだことに基づき、自分の将来の夢について話す。 4. 自分の考えや気持ち伝える表現 (hope [that] S+V ~など) の使い方を理解する。	「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」 ① ペア・ワークにおいて、互いに協力しながら会話を続ける。 ② 人物についての説明を読んで、その内容を口頭で要約することができる。 ③ 読んだことに基づき、自分の将来の夢について話すことができる。 (本単元では評価しない) ④ 自分の考えや気持ち伝える表現 (hope [that] S+V ~など) の使い方を理解している。	ねらい	1. 教師のオーラル・インロダクションを聞いたり質問に答えたりするなどして、単元内容についての背景となる知識 (スキーマ) を高める。 2. ワークシートに示された概要把握のための質問を見てから本文全体を読み、必要な情報についてメモをとる。 3. ペアでQ-Aを行い、内容を確認する。 (第2時から第5時の各時に1セクションずつ扱うこととする。) 1. 教科書を閉じて本文の音声を2回程度聞き、話題や概要を把握する。 2. 必要に応じて、語、連語、慣用表現及び文構造について、意味や用法を確認する。 3. 本文を読んで、ワークシート上の Summary Chart (要約を書き込むフローチャート) を完成させる。 4. 教師の質問に答えながら、Summary Chart 上の記入事項を確認し、本文の内容理解を深める。 5. CD を聞きながら、音読やシャドーイングをする。 6. ペアになって、Summary Chart を見ながら、各セクションの内容を口頭で要約する。その際、次のように、要約の方法を段階的に指導する。 Step 1 (§ 1) : 与えられた質問に解答し、質問の英語と解答をつなぎ合わせて要約する。 Step 2 (§ 2) : 与えられた複数のキーワードを用いて要約する。 Step 3 (§ 3 及び § 4) : 自分で本文からキーワードを抜き出し、それを用いて要約する。 7. 感想や意見を述べたり語を続けたりする際に必要な表現 (He's cool / great / fantastic など + because ~ や What do you think? など) を実際の場面で使えるように習熟する。 8. ワークシートに、各セクションの内容に対する感想や意見について話すためのキーワードをメモし、それを参考にしながらペアで伝え合う。	評価規準④	筆記テスト (後日)	
2～5			各セクション (§ 1～§ 4) の内容を口頭で要約するとともに、それに対する感想や意見を伝える。						
6			学習した語彙や文法事項等を活用して、本文を自分の言葉で要約したり自分の将来の夢について話したりする。						

7～8	インタビューテスト	形式	教師が個々の生徒へ質問をする。	評価規準② 評価規準③	インタビューテスト
		内容	1. 指定された3つのキーワードを用いて、本文全体の内容を口頭で要約する。 2. 自分の将来の夢について話す。		
		留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューテストは、教室の近くに別の場所を設けて実施する。 ・テストを待っている生徒は、他教師の監督の下、本単元の内容に関連した別の英文を読むなどの課題に取り組みさせる。 ・評価の信頼性を確保するため、可能な限り、面接を録音（録画）しておく。 ・所要時間は生徒1人につき約2分とし、2時間連続のテスト時間帯を確保する。 		
後日	筆記テスト（定期考査）		hope [that] S'+V'～ について、場面を与えて適切な表現を書かせる問題を出題する。	評価規準④	筆記テスト

各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き Q&A

〔趣旨・目的〕

1. 何のために「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するのですか。
2. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定すると、どのような効果があるのですか。
3. 学習到達目標とは、全ての生徒が達成すべき目標ですか。あるいは、達成することが望ましいものにとどまる目標ですか。
4. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標と学習指導要領上の目標とはどのような関係にあるのですか。
5. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は教室内活動に即したものです。あるいは、実生活における外国語の使用場面に即したものとなるのですか。
6. 全ての中・高等学校において作成が求められるものですか。
7. 小学校においても、今後、作成が求められるのですか。

〔設定手順〕

8. どのようにして「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するのですか。
9. 能力記述文とは何ですか。
10. 能力記述文はどのように作成するのですか。
11. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標には文法事項も含めるのですか。
12. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標に、話したり書いたりする文の数や語数、要する時間などの数値的な目安を含めてもよいのですか。各能力記述文はどの程度、具体的なものとする必要があるのですか。
13. 学年ごとに学習到達目標を設定する際、1つの技能ごとにいくつくらいの能力記述文を作成するのが適当ですか。
14. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するにあたって、国のひな形はあるのですか。
15. 外部検定試験に関する到達目標を設定してもよいのですか。（例. ○○試験で○級あるいは○点がとれるようになる）
16. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するにあたって、学校内や外国語科内ではどのように取り組めばよいのですか。
17. 「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（CEFR）」やCEFRを踏まえた国内の取組、外部検定試験の実施団体が開発した「CAN-DO リスト」をそのまま使ってもよいのですか。
18. 入試に関する事項（例. 大学入試センター試験の大問○で○割得点できる）を含めてもよいのですか。
19. 生徒間の学力差が大きい学校においては、どのように学習到達目標を設定すればよいのですか。中間層の生徒の外国語能力を想定するのですか。

20. 複数の学科やコースを設けている場合、それぞれ別の学習到達目標を設定してもよいのですか。
21. 卒業時の学習到達目標は第3学年（最終学年）の目標と同じものとなるのですか。

〔活用方法〕

22. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標は、どのように活用するのですか。
23. 従来作成している年間指導計画と「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標とはどのような関係にあるのですか。
24. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標の達成に資する授業実践の例を教えてください。
25. 外国語科における観点別学習状況の評価と「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標とはどのような関係にあるのですか。
26. 観点別学習状況の評価における全ての観点について「CAN-DO リスト」の形で目標設定をするのですか。
27. 観点別学習状況の評価における単元の評価規準を「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標として使ってもよいのですか。
28. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標は、どのように公表したり生徒や保護者等と共有したりすればよいのですか。

〔設定した学習到達目標の達成度を把握するための評価〕

29. 設定した学習到達目標全てについて評価しなければならないのですか。
30. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を達成できなかった生徒についてはどのように対応するのですか。
31. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を、生徒による自己評価に用いてもよいのですか。
32. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標の評価を、学年末の成績（評価や評定）にどう反映させるのですか。

〔達成状況の把握，設定した学習到達目標の見直し〕

33. 設定した学習到達目標の見直しは、いつ、どのように行えばよいのですか。
34. 設定した学習到達目標について、生徒の達成割合を示す必要はあるのですか。

〔趣旨・目的〕

1. 何のために「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定する目的として、以下のことがあげられます。

- ・ 学習指導要領に基づき、観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、主に教員が生徒の指導と評価の改善に活用すること
- ・ 学習指導要領を踏まえ、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能を総合的に育成し、外国語によるコミュニケーション能力、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で自らの考えを適切に伝える能力並びに思考力、判断力、表現力を養う指導につなげること
- ・ 生涯学習の観点から、教員が生徒と目標を共有することにより、言語習得に必要な自律的学習者として主体的に学習する態度・姿勢を生徒が身に付けること

☞ 参照：本文3～5ページ「趣旨・目的」

2. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定すると、どのような効果があるのですか。

(答) 実際の言語使用場面で言語を使って何ができるかということを見通した指導と評価を行うことができるようになります。

例えば、学習到達目標を「簡単な物語文を読んで、概要を口頭で述べることができる」と設定した場合、その目標が達成される可能性を高くするような指導を計画し、実施することになります。したがって、教科書のどの単元をいつ教えるかといった時間軸に沿った指導にとどまらず、目標を達成するために教科書の活用の仕方を工夫しつつ、教科書以外の教材も加えるなどして、言語活動を計画し、授業を実際のコミュニケーションの場とすることができます。

また、「簡単な物語文を読んで、概要を口頭で述べることができる」という目標が達成されたかどうかを把握するためには、実際に概要を口頭で述べるという活動を行うことによって評価しなければなりません。従来の評価方法が、個別の言語知識を問う筆記試験に偏りがちであった場合は、「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定することにより評価方法も併せて改善することができます(本文12ページの「評価方法」も参照)。加えて、パフォーマンス評価やインタビューなどを通じて生徒理解が深まることも期待されます。

さらに、学習到達目標を設定するにあたって、外国語科担当教員等全員が参加するとともに、目標を設定した後も、実際の授業における言語活動の計

画や言語活動を効果的に行うための教材の準備、指導方法や評価方法の共有等にあたって協力し続けることにより、外国語科担当教員等のチームワークや学校としての指導力が高まることも期待されます。

また、教員と生徒が外国語学習の目標を共有することによって、生徒自身にも、言語を用いて「～ができるようになりたい」、「～ができるようになることを目指す」といった自覚が芽生え、言語習得に必要な自律的学習者としての態度・姿勢が身に付くとともに、「言語を用いて～ができるようになった」という達成感による学習意欲の更なる向上にもつながることが期待されます。

3. 学習到達目標とは、全ての生徒が達成すべき目標ですか。あるいは、達成することが望ましいものにとどまる目標ですか。

(答) 本手引きにおける学習到達目標とは、各学校において、全ての生徒に求められる外国語能力を達成するためのものです。

☞ 参照：本文6ページ 「学習到達目標の意味」

4. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標と学習指導要領上の目標とはどのような関係にあるのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づいたものである必要があります。具体的には外国語科及び外国語科の各科目における目標のうち、「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」の観点に対応するものについて、「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定することが適切であると考えられます。

学習指導要領上、中学校の外国語科の目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」となっています。更に、英語の目標は、次の4つを示しており、その他の外国語についても英語の目標に準じて行うこととしています。

- (1) 初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。
- (2) 初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
- (3) 英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。
- (4) 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

上記の目標を卒業時まで達成するためのものとして、学年ごとの学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定することになります。学習指導要領においても、指導計画作成上の配慮事項として、「各学校においては、生徒や地域の実態に応じて、学年ごとの目標を適切に定め、3 学年間を通して英語の目標の実現を図るようにすること。」とされています。

一方、高等学校の外国語科の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」となっており、更に、科目ごとに目標が設定されています。高等学校においては、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づき、生徒の実態等に応じて、学年ごとの学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定することになります。中学校とは異なり、単位制を併用していること、外国語科の科目の開設状況が各学校により異なることに留意が必要です。

☞ 参照：「10. 能力記述文はどのように作成するのですか」及び「25. 外国語科における観点別学習状況の評価と『CAN-DO リスト』の形で設定した学習到達目標とはどのような関係にあるのですか。」

5. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は教室内活動に即したものでか。あるいは、実生活における外国語の使用場面に即したものとなるのですか。

(答) 教室内における言語活動と実生活における外国語の使用場面を区別する必要はないと考えられます。

学習指導要領では、指導にあたっては、実際に言語を使用した活動を行うように配慮することとされており、そのために取り上げる生徒の身近な暮らしに関わる場面や具体的な言語の働きの例が示されています。教科書を中心とした教材において扱われている言語材料をもとに、授業を実際のコミュニケーションの場面とすることが必要です。すなわち、教室内においても、実生活におけるコミュニケーションの場면을想定した言語活動を充実させることが求められます。

また、教室の中で行っている活動が、教室の外の場面、例えば外国語で高等教育を受けたり、外国語を使って働いたりすることにつながっていることを意識することが大切です。ただし、各目標の設定にあたっては、指導及び達成度を把握するための評価が可能であることが条件となります。

6. 全ての中・高等学校において作成が求められるものですか。

(答)「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は、全ての中・高等学校において作成することが望まれます。

7. 小学校においても、今後、作成が求められるのですか。

(答) 小学校の外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」ことです。

したがって、「聞くこと」や「話すこと」などの技能を用いて何ができるようになるかという観点からの目標設定にはなじみにくいことから、小学校の外国語活動について、作成が求められるものではありません。

〔設定手順〕

8. どのようにして「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するのですか。

(答) 外国語担当教員等全員の参加の下、生徒の学習の状況や地域の実態等を踏まえ、卒業時の学習到達目標を、言語を用いて「～することができる」という形で設定します。

次に、卒業時の目標を達成するための学年ごとの目標を、年間の指導と評価の計画、単元ごとの指導と評価の計画の策定と並行して、4技能を用いて「～することができる」という形（「CAN-DO リスト」の形）で設定します。その際、卒業時の学習到達目標、学年ごとの「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標、年間及び単元ごとの指導と評価の計画が、それぞれ相互に対応したものとなるよう調整します。

☞ 参照：本文5～9ページ『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標の設定手順」、9～12ページ「活用方法」、16～22ページ『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例」

9. 能力記述文とは何ですか。

(答) 学習した後に、言語を使って行動する主体として何ができるようになるかを記述したものです。すなわち、言語の4技能（「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」）を用いて何ができるようになるかを「～する

ことができる」という形で具体的に記述したものとなります。

本手引きでは、卒業時まで達成する学習到達目標、及び学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標を、能力記述文を用いて設定することを推奨しています。能力記述文は、ある言語の使用場面における言語活動を表すものであり、生徒の言語能力を踏まえたものとする必要があります。さらに、学習活動の一環として行う言語活動であり、各学校が適切な評価方法を用いて評価できるものである必要があります。

(能力記述文の例)

- ・ 基本的な挨拶の決まり文句を聞いて、理解することができる。
- ・ 日常生活に関する簡単な質問をしたり、簡単な質問に答えたりすることができる。
- ・ 身近な話題について発言したり、反応したりすることができる。
- ・ 写真や絵、地図などの視覚的補助を利用しながら、簡単な語句や文を使って、自分の毎日の生活に直接関連のある話題（自分のこと、学校のこと、地域のことなど）について、短いスピーチをすることができる。
- ・ 構成がはっきりした物語や現代の文学作品のあらすじを理解することができる。
- ・ 自分の関心のある分野の様々な話題について、簡単なつながりのある文章を書くことができる。

☞ 参照：本文7～8ページ「能力記述文の作成」

10. 能力記述文はどのように作成するのですか。

(答) 学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標を示す能力記述文については、例えば、以下の方法を用いて作成することができます。

- ・ 高等学校の場合は学習指導要領上の外国語科の目標、当該学年で履修する科目の目標及び教科書の内容など、中学校の場合は学習指導要領上の外国語科の目標及び当該学年で使用する教科書の内容などを踏まえ、当該学年の終了時点で生徒が達成すべき目標を能力記述文で表す。同時に、これら のことを踏まえ、教科書などの教材を用いた単元ごとの目標を設定し、それが能力記述文に対応したものになっているかを検討する。
また、複数の単元の目標をまとめて1つの学習到達目標を示す能力記述文を作成するという方法も考えられる。その際、例えば、4技能のうち「話すこと」に関する目標がない場合などには、年間及び単元の指導計画を見直す必要があり、見直した指導計画を踏まえて、学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標を示す能

力記述文を作成する。

- 必要に応じて、「外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠（CEFR）」を踏まえた国内の取組，外部検定試験の実施団体による既存の取組等を参照し，これを実際の学習活動を踏まえたものに設定し直す。

（例）例えば，高等学校卒業時の生徒に求められる英語力の補足的な外部指標として外部検定試験の級や点数を目安として掲げている場合，当該試験の該当する級や点数に相応する CAN-DO リストを参照して，そこに到達するための学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標案を作成し，これに実際の学習活動に基づいた単元の目標等を考慮して修正を加えるといった方法が考えられる。

- 中学校の外国語科における英語の目標は3年間を通じたものが4技能ごとに「～できるようにする」という形で学習指導要領に示されているので，学年ごとの目標は，例えば，これらの目標を「どのような条件の下でできるか」，「どの程度できるか」，「どのような内容であればできるか」などによって段階に分けたものを設定することが考えられる。
- 高等学校についても，卒業時の目標を達成するための学年ごとの学習到達目標を，「どのような条件の下でできるか」，「どの程度できるか」，「どのような内容であればできるか」などによって段階に分けたものとして設定することが考えられる。

☞ 参照：本文7～8ページ「能力記述文の作成」

11. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標には文法事項も含めるのですか。

（答）文法は，コミュニケーションを支えるものであり，言語活動と効果的に関連付けて指導するものです。例えば，過去の事柄について表現するためには，動詞の時制の使い方を理解している必要があります。

CAN-DO リストの形での学習到達目標との関係では，観点別学習状況の評価における「言語や文化についての知識・理解」に整理される文法事項を知識としてもっているかどうかではなく，それを活用して実際に表現したり理解したりする能力という観点から目標設定や評価を行うこととなります。

例えば「過去形を使うことができる」という形で目標設定を行うのではなく，「過去の出来事について話す（書く）ことができる」という形にすることで間接的に文法事項を含めることは可能です。

12. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標に，話したり書いたりする文の

数や語数，要する時間などの数値的な目安を含めてもよいのですか。各能力記述文はどの程度，具体的なものとする必要があるのですか。

(答) 本手引きにおいては，学年ごとの学習到達目標を，4技能を用いて「～することができる」という行動を表す能力記述文からなる「CAN-DO リスト」の形で設定することを推奨しています。

1つの能力記述文が示す目標は，年間を通じた学習指導により達成を目指すものであり，あまり細かくすると，それをより具体的に反映させる年間指導計画及び単元計画の作成が難しくなります。したがって，能力記述文の具体性は，あまり細かな数値的な目安を含めるよりも，学習指導要領で示されている外国語科及び外国語科の各科目の内容における表現の程度にしておくこと，年間指導計画や単元計画と適切に関連付けがしやすくなると考えられます。

ただし，指導する側の共通理解として，例えばどのような条件であればどの程度できるかなど，目標達成にあたっての数値的な目安を共有することは可能です。

13. 学年ごとに学習到達目標を設定する際，1つの技能ごとにいくつくらいの能力記述文を作成するのが適当ですか。

(答) 具体的にいくつの能力記述文を作成するのかは，卒業時の目標，(高等学校の場合)当該学年で履修する科目の単位数，各能力記述文について評価をする際に要する時間などを考慮して決めることになるため，一概にいくつが目安ということは言えません。少なくとも，能力記述文を設定し過ぎて指導や評価ができないという事態は避けなくてはなりません。

目標設定からそれを達成するための授業内の活動，評価の実施にいたるまでの実行可能性を考え，無理のない範囲で設定することが適当です。

14. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するにあたって，国のひな形はあるのですか。

(答) 本手引きは，各学校が「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定する過程を経ることにより，日々の授業や評価の改善に役立てていただくために作成しているものですので，現段階では，「CAN-DO リスト」の形で全国一律の学習到達目標は示していません。

15. 外部検定試験に関する到達目標を設定してもよいのですか。(例. ○○試験で○級あるいは○点がとれるようになる)

(答) 学習到達目標の達成状況を把握するにあたって、卒業時の目標、学年ごとの目標、単元計画等を作成した上で、外部検定試験等を外部指標として補足的に活用することは可能です。

その際、その外部検定試験が何を測定しているのかを把握した上で活用することが重要であり、外部検定試験の受験結果そのものが目標となるべきではないこと、更に、外部検定試験の結果によって評定につながる評価をすることは適当でないことに留意する必要があります。

16. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定するにあたって、学校内や外国語科内でどのように取り組めばよいのですか。

(答) 学習到達目標の設定過程に、外国語科担当教員や可能であれば外国語指導助手など、外国語教育に携わる者全員が参加し、生徒の実態を踏まえた上で、育成したい能力や生徒像、学習指導要領に基づいた指導と評価の方法を共有することが必要です。そのためには、管理職の理解や協力、リーダーシップの発揮が期待されます。

また、目標を設定した後も、実際の授業における言語活動の計画や言語活動を効果的に行うための教材の準備等について、外国語科担当教員等全員が協力するとともに、互いの授業の参観等を通じて、指導方法や評価方法等を共有したり改善したりすることが望まれます。

なお、外国語科担当教員が1、2名程度しかいない小規模校等において「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定する際は、例えば中学校であれば、同一の教科書を採択している地区内で複数の学校が協力し合うことなどが考えられます。また、地域の拠点となる学校を中心とした協力体制を作ることも考えられます。ただし、学習到達目標は、それぞれの学校における生徒の実態等を踏まえ、各学校が設定する必要があります。

17. 「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (CEFR)」や CEFR を踏まえた国内の取組、外部検定試験の実施団体が開発した「CAN-DO リスト」をそのまま使ってもよいのですか。

(答) 学習指導要領に基づき、卒業時及び学年ごとの学習到達目標を、年間及び単元ごとの指導と評価の計画の策定と並行して設定することにより、指導や評価の在り方を見直し、授業改善につなげることがこの取組のねらいですので、既存の「CAN-DO リスト」をそのまま使うことは想定されません。

ただし、例えば、能力記述文(言語を使って「～することができる」という形の文)の書き方や各能力記述文の難易度に基づいた配置について、全体的な能力発達段階を示している「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (CEFR)」や CEFR を踏まえた国内の取組、外部検定試験の実施団

体が開発した「CAN-DO リスト」等を参照することはできます。既存の取組を参照することにより、学年の進行とともに学習到達目標も生徒の発達段階に応じたものを作成することが容易になると考えられます。

なお、既存の取組を参照する場合であっても、各学校や在籍する生徒の実情に応じた分かりやすいものを作成し、指導や評価に活用する中で、設定した目標が生徒の実情に合うものとなるよう、適切な時期に見直すことが重要です。

18. 入試に関する事項（例. 大学入試センター試験の大問○で○割得点できる）を含めてもよいのですか。

（答）「CAN-DO リスト」の形で設定する学習到達目標は、言語を用いて何ができるようになるかを示すものですので、入試に関する事項を含めることは適当ではありません。

19. 生徒間の学力差が大きい学校においては、どのように学習到達目標を設定すればよいのですか。中間層の生徒の外国語能力を想定するのですか。

（答）本手引きにおける学習到達目標は、全ての生徒に求められる外国語能力を達成するためのものです。これを前提とした上で、生徒間の学力差が大きい学校においても、生徒全員が学習意欲を維持続けることができるように工夫することが大切です。

例えば、「全ての生徒に求められるのは、設定した 10 項目のうち①～⑥の 6 項目を達成することであり、習熟に時間がかかる生徒にとっては、少しでも①～⑥の 6 項目に近づくよう学習意欲を維持させ、目標を超えた伸長がみられる生徒には、さらに⑦～⑩項目までの達成を目指す」といった目標を設定することなどが考えられます。

20. 複数の学科やコースを設けている場合、それぞれ別の学習到達目標を設定してもよいのですか。

（答）複数の学科やコースが設けられている場合は、それぞれの学科やコース別に「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定することは可能です。

21. 卒業時の学習到達目標は第 3 学年（最終学年）の目標と同じものとなるのですか。

(答) 第3学年の学習到達目標を卒業時の学習到達目標とすることも可能です。なお、本手引きにおける「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標例では、卒業時の目標は4技能を併せて1つの文で示し、第3学年を含めた学年ごとの学習到達目標については、技能別に複数の能力記述文で示しています。

〔活用方法〕

22. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標は、どのように活用するのですか。

(答) 外国語担当教員等全員が、「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、卒業時までには生徒にどのような力を身に付けさせることを目標としているかを常に確認するとともに、当該単元の学習を通じて、言語を使って何ができるようになるかということ意識した指導と評価を行うことが期待されます。

そのためには、「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を年間及び単元の指導と評価の計画に位置づけ、各単元・各時の指導や評価に反映させることが重要です。

☞ 参照：本文9～12ページ「活用方法」、16～22ページ「『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例」

23. 従来作成している年間指導計画と「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標とはどのような関係にあるのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標が年間及び単元の指導と評価の計画に反映され、有機的に連動していることが重要です。

学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標は、中学校の場合は外国語科の各単元での指導を通じて、高等学校の場合は外国語科の科目の各単元での指導を通じて、実現されることとなります。

☞ 参照：本文9～12ページ「活用方法」、16～22ページの「『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例」

24. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標の達成に資する授業実践の例を教えてください。

(答)「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標の達成に資する授業を行うためには、授業の中で言語活動を充実させることが大切です。言語活動の充実は、現行学習指導要領において、生徒の思考力・判断力・表現力等を育むために各教科等を貫く重要な改善の視点として位置付けられています。

19～22 ページの『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例（高等学校）」を例にとると、この指導案で取り上げられている学習活動（言語活動）は、以下のような形で「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標の達成に資するものとなります。

主な学習活動（言語活動）

- ・各セクションの内容を口頭で要約する。
- ・ペアで、メモに基づいて、自分の将来の夢について伝え合う。

単元の目標

- ・人物についての説明を読んで、その内容を口頭で要約する。
- ・読んだことに基づき、自分の将来の夢について話す。

学年の目標

- ・聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりすることができる。

卒業時の目標

英語を通じて、場面や状況、背景、相手の表情や反応などを踏まえて、話し手や書き手の伝えたいことを的確に理解するとともに、自分が伝えたいことを適切に伝えることができる。

また、文部科学省及び国立教育政策研究所による次の資料には、「外国語表現の能力」や「外国語理解の能力」と対応する授業実践例や言語活動例が含まれていますので、参照ください。いずれも、校種別に出されています。

- ・「新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料」（中学校は Vol. 1 及び Vol. 2, 高等学校は Vol. 1, Vol. 2 及び Vol. 3）
※中学校の Vol.2 及び高等学校の Vol.3 については、文部科学省のホームページに各事例の学習指導案を掲載しています。

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1322195.htm

- ・「言語活動の充実に関する指導事例集」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiyouen/1300990.htm

- ・「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html>

25. 外国語科における観点別学習状況の評価と「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標とはどのような関係にあるのですか。

(答) 観点別学習状況評価の趣旨として、指導と評価の一体化を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することがありますが、「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定することにより、これを観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」の観点の評価に生かすことが期待されます。

本手引きでは、主として学年ごとの学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定することを推奨していますが、観点別学習状況の評価で用いられる評価規準は、日常の授業や単元といったより短い区切りでの評価においても用いられることが想定されます。

なお、観点別学習状況の評価においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」及び「言語や文化についての知識・理解」の観点と併せて、学習指導要領に示す外国語科の目標（高等学校については、学習指導要領に示す外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づき、学校が地域や生徒の実態に即して定めた当該外国語科及び外国語科の各科目の目標）¹に照らして、その実現状況の評価を着実に実施することが必要です。

(通年の目標設定)

対応したものに

(単元の評価規準)

「CAN-DO リスト」の形で の学習到達目標の設定			
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
評価の基本的な要素（観点）			

☞ 参照：本文 12～14 ページ「設定した目標の達成度を把握するための評価方法及び評価時期」、16～22 ページ「『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例」

¹「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）（平成 22 年 5 月 11 日）」の別紙 2Ⅱ1(1)及び別紙 3Ⅱ1(1)参照

26. 観点別学習状況の評価における全ての観点について「CAN-DO リスト」の形で目標設定をするのですか。

(答) 観点別学習状況の評価における外国語科の評価の観点は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」, 「外国語表現の能力」, 「外国語理解の能力」及び「言語や文化についての知識・理解」の4観点です。

これに対し, 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定する際は, 言語を用いて何ができるようになるかという能力記述文を用いて表すため, これに対応しやすいのは, 4つの観点のうち「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」の2つの観点になります。

☞ 参照: 本文 12~14 ページ「設定した目標の達成度を把握するための評価方法及び評価時期」

27. 観点別学習状況の評価における単元の評価規準²を「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標として使ってもよいのですか。

(答) 本手引きにおいては, 言語を用いて「~することができる」という形(「CAN-DO リスト」の形)で, 学習指導要領の外国語科及び外国語科の各科目の目標に基づく学年ごとの学習到達目標を設定することを推奨しています。

したがって, 観点別学習状況の評価における単元の評価規準がそのまま「CAN-DO リスト」の形で設定する学習到達目標となることは考えにくく, 年間を通じて, 複数の単元における学習を通して, ある学習到達目標を達成することになります。

単元の評価規準は教科書などの教材の内容等に応じた実際の学習活動を踏まえた具体的なものが想定されますが, 学年ごとの「CAN-DO リスト」の形の学習到達目標は, 年間の指導を通じて達成されるものであり, より抽象度の高いものとなることが考えられます。

28. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標は, どのように公表したり生徒や保護者等と共有したりすればよいのですか。

(答) シラバスを作成している学校については, シラバスに「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を反映させ, 生徒と共有するとともに, これを

² 評価規準とは, 設定した目標について, 生徒がどのような学習状況を実現すればよいのかを具体的に想定したものである。観点ごとに設定し, 「おおむね満足できる」状況を示している。

公表することが考えられます。また、「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を生徒による自己評価のために分かりやすく書き下したものを作成する場合は、これを公表することも考えられます。

☞ 参照：「31. 『CAN-DO リスト』の形で設定した学習到達目標を、生徒による自己評価に用いてもよいのですか。」

〔設定した学習到達目標の達成度を把握するための評価〕

29. 設定した学習到達目標全てについて評価しなければならないのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標にそのまま準拠した評価を行うのではなく、年間及び単元の指導と評価の計画に位置付けた目標の達成状況の評価することになります。すなわち、単元の目標の達成状況の評価することで、間接的に「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標全てについて達成度を評価する必要があります。

したがって、あらかじめ、「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標と年間及び単元の指導と評価の計画を関連付けておくことが重要です。

☞ 参照：16～22 ページ 『『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例〕

30. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を達成できなかった生徒についてはどのように対応するのですか。

(答) 習熟により時間がかかる生徒についても、きめ細やかな指導を通じ、最終的に目標を達成することを目指すことが重要です。その際、生徒が目標に到達しつつある過程を教員が適切に評価し、生徒の学習を支援することが重要です。

31. 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を、生徒による自己評価に用いてもよいのですか。

(答) 生徒による自己評価にも用いることは有益です。教員による評価とは別に、「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標を生徒と共有するとともに、生徒による自己評価を促すことによって自分の外国語能力を客観的に捉えることは、生徒による学習の振り返りにつながり、生徒の外国語学習への意欲を向上させることができます。その際、学習到達目標を生徒に分かりや

すく書き下した自己評価表を作成することも考えられます。

また、教員による評価と照らし合わせることにより、指導の振り返りにもつながります。

ただし、生徒による自己評価の結果を、教員が行う評価に組み入れることはできません。

☞ 参照：本文 13 ページ「生徒による自己評価」

32. 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の評価を、学年末の成績（評価や評定）にどう反映させるのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標にそのまま準拠した評価を行うのではなく、年間及び単元の指導と評価の計画に位置付けた目標の達成状況の評価することになります。すなわち、単元の目標の達成状況を、その単元における評価規準を用いて評価することで、間接的に「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標について達成度を評価することになります。

したがって、あらかじめ、「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標と年間及び単元の指導と評価の計画を関連付けておくことが重要です。

「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は、観点別学習状況の評価のうち、「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」の評価について活用するのに適しています。その際、学習到達目標に対応した学習活動の特質等に応じて、多肢選択形式等の筆記テストだけではなく、面接、エッセー、スピーチ等のパフォーマンス評価³、活動の観察等、様々な評価方法の中からその場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択することが重要です。

これに加えて、観点別学習状況の評価においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」及び「言語や文化についての知識・理解」の観点についてもそれぞれ評価する必要があります。その際、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」は、生徒が言語活動に積極的・主体的に取り組むことがコミュニケーション能力を身に付ける上で不可欠であるため極めて重要な観点であること、「言語や文化についての知識・理解」は、単に知識を暗記しているかどうかということではなく、知識・理解がコミュニケーションを目的とした言語運用に資する形で身に付いているかを評価することに留意する必要があります。

なお、生徒の学習の実現状況を記録するための評価を行う際には、単元等のある程度長い区切りの中で適切に設定した時期において評価した上で、学期や学年といった単位で学習の実現状況を総括することになります。その際、あら

³ パフォーマンス評価の例としては、国立教育政策研究所「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 外国語）」（平成 23 年 11 月）の事例 4，及び「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 外国語）」（平成 24 年 3 月）の事例を参照

はじめ、それぞれの評価結果をどのような方法で総括し、評定に反映させるかを定めておくとともに、観点ごとの総括及び評定への総括の考え方や方法について、生徒及び保護者に十分説明し理解を得ることが大切です。

☞ 参照：本文 12～14 ページ「設定した目標の達成度を把握するための評価方法及び評価時期」、16～22 ページ「『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例」

〔達成状況の把握，設定した学習到達目標の見直し〕

33. 設定した学習到達目標の見直しは、いつ、どのように行えばよいのですか。

(答) 外国語科担当教員等が全員で生徒の目標の達成状況を把握し、必要に応じて指導方法を改善します。また、評価の妥当性及び信頼性を高める視点から、評価の方法も見直します。さらに、設定した目標が適切なものであったかどうかを検討し、必要に応じて、設定した目標の内容や難易度、目標の設定や評価を行う時期を変更するといった PDCA サイクルを確立することが重要です。

見直しの時期としては、学年末が望ましいですが、学年途中で見直す場合には、生徒や保護者へも周知する必要があるため、どのような場合に見直しを行うのか、あらかじめ決定しておく必要があります。

☞ 参照：本文 14～15 ページ「達成状況の把握，設定した学習到達目標の見直し」

34. 設定した学習到達目標について、生徒の達成割合を示す必要はあるのですか。

(答) 「CAN-DO リスト」の形で設定した学習到達目標は、一人一人の生徒について達成状況を把握すべきものであり、学級などの特定の集団のうちの何人の生徒が目標を達成したかという割合を把握することが主たる目的ではありません。

ただし、特定の学習到達目標について、集団の中での達成割合を把握することにより、当該目標の設定が適切であったかどうかを見直すための判断材料とすることは可能です。

外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠

Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (CEFR)

CEFR は、学習段階ごとの到達基準の設定，及び国際的な比較が可能なアウトカム評価のための実用的なツールとして、20 年以上にわたる研究及び幅広い協議を経て、欧州評議会が開発され、2001 年に公表された。CEFR は、語学技能の相互認定の拠り所となるものであり、留学や、労働市場における人材の流動性を高めることを容易にするものとされている。近年は学校教育におけるカリキュラム改革等にしばしば用いられている。

CEFR は「共通参照レベル」として、言語能力を A1, A2 レベル（基礎段階の言語使用者）、B1, B2（自立した言語使用者）、C1, C2（熟達した言語使用者）の 6 段階に分け、「聞くこと」、「読むこと」、（以上 2 つは「理解すること）」、「やり取り」、「表現」、（以上 2 つは「話すこと）」、「書くこと」の 5 つの能力カテゴリーに分けて言語活動の内容を表している。

欧州においては、CEFR の「共通参照レベル」が、法令により、初等教育、中等教育を通じての目標として適用されたり、欧州域内における言語能力に関する調査を実施するにあたって用いられたりしている。

Table 1. *Common Reference Levels: global scale*

Proficient User	C2	Can understand with ease virtually everything heard or read. Can summarise information from different spoken and written sources, reconstructing arguments and accounts in a coherent presentation. Can express him/herself spontaneously, very fluently and precisely, differentiating finer shades of meaning even in more complex situations.
	C1	Can understand a wide range of demanding, longer texts, and recognize implicit meaning. Can express him/herself fluently and spontaneously without much obvious searching for expressions. Can use language flexibly and effectively for social, academic and professional purposes. Can produce clear, well-structured, detailed text on complex subjects, showing controlled use of organisational patterns, connectors and cohesive devices.
Independent User	B2	Can understand the main ideas of complex text on both concrete and abstract topics, including technical discussions in his/her field of specialisation. Can interact with a degree of fluency and spontaneity that makes regular interaction with native speakers quite possible without strain for either party. Can produce clear, detailed text on a wide range of subjects and explain a viewpoint on a topical issue giving the advantages and disadvantages of various options.
	B1	Can understand the main points of clear standard input on familiar matters regularly encountered in work, school, leisure, etc. Can deal with most situations likely to arise whilst travelling in an area where the language is spoken. Can produce simple connected text on topics which are familiar or of personal interest. Can describe experiences and events, dreams, hopes and ambitions and briefly give reasons and explanations for opinions and plans.
Basic User	A2	Can understand sentences and frequently used expressions related to areas of most immediate relevance (e.g. very basic personal and family information, shopping, local geography, employment). Can communicate in simple and routine tasks requiring a simple and direct exchange of information on familiar and routine matters. Can describe in simple terms aspects of his/her background, immediate environment and matters in areas of immediate need.
	A1	Can understand and use familiar everyday expressions and very basic phrases aimed at the satisfaction of needs of a concrete type. Can introduce him/herself and others and can ask and answer questions about personal details such as where he/she lives, people he/she knows and things he/she has. Can interact in a simple way provided the other person talks slowly and clearly and is prepared to help.

Table 2. Common Reference Levels: self-assessment grid

		A1	A2	B1
U N D E R S T A N D I N G	Listening	I can recognise familiar words and very basic phrases concerning myself, my family and immediate concrete surroundings when people speak slowly and clearly.	I can understand phrases and the highest frequency vocabulary related to areas of most immediate personal relevance (e.g. very basic personal and family information, shopping, local area, employment). I can catch the main point in short, clear, simple messages and announcements.	I can understand the main points of clear standard speech on familiar matters regularly encountered in work, school, leisure, etc. I can understand the main point of many radio or TV programmes on current affairs or topics of personal or professional interest when the delivery is relatively slow and clear.
	Reading	I can understand familiar names, words and very simple sentences, for example on notices and posters or in catalogues.	I can read very short, simple texts. I can find specific, predictable information in simple everyday material such as advertisements, prospectuses, menus and timetables and I can understand short simple personal letters.	I can understand texts that consist mainly of high frequency everyday or job-related language. I can understand the description of events, feelings and wishes in personal letters.
S P E A K I N G	Spoken Interaction	I can interact in a simple way provided the other person is prepared to repeat or rephrase things at a slower rate of speech and help me formulate what I'm trying to say. I can ask and answer simple questions in areas of immediate need or on very familiar topics.	I can communicate in simple and routine tasks requiring a simple and direct exchange of information on familiar topics and activities. I can handle very short social exchanges, even though I can't usually understand enough to keep the conversation going myself.	I can deal with most situations likely to arise whilst travelling in an area where the language is spoken. I can enter unprepared into conversation on topics that are familiar, of personal interest or pertinent to everyday life (e.g. family, hobbies, work, travel and current events).
	Spoken Production	I can use simple phrases and sentences to describe where I live and people I know.	I can use a series of phrases and sentences to describe in simple terms my family and other people, living conditions, my educational background and my present or most recent job.	I can connect phrases in a simple way in order to describe experiences and events, my dreams, hopes and ambitions. I can briefly give reasons and explanations for opinions and plans. I can narrate a story or relate the plot of a book or film and describe my reactions.
W R I T I N G	Writing	I can write a short, simple postcard, for example sending holiday greetings. I can fill in forms with personal details, for example entering my name, nationality and address on a hotel registration form.	I can write short, simple notes and messages relating to matters in areas of immediate need. I can write a very simple personal letter, for example thanking someone for something.	I can write simple connected text on topics which are familiar or of personal interest. I can write personal letters describing experiences and impressions.

B2	C1	C2
<p>I can understand extended speech and lectures and follow even complex lines of argument provided the topic is reasonably familiar. I can understand most TV news and current affairs programmes. I can understand the majority of films in standard dialect.</p>	<p>I can understand extended speech even when it is not clearly structured and when relationships are only implied and not signalled explicitly. I can understand television programmes and films without too much effort.</p>	<p>I have no difficulty in understanding any kind of spoken language, whether live or broadcast, even when delivered at fast native speed, provided I have some time to get familiar with the accent.</p>
<p>I can read articles and reports concerned with contemporary problems in which the writers adopt particular attitudes or viewpoints. I can understand contemporary literary prose.</p>	<p>I can understand long and complex factual and literary texts, appreciating distinctions of style. I can understand specialised articles and longer technical instructions, even when they do not relate to my field.</p>	<p>I can read with ease virtually all forms of the written language, including abstract, structurally or linguistically complex texts such as manuals, specialised articles and literary works.</p>
<p>I can interact with a degree of fluency and spontaneity that makes regular interaction with native speakers quite possible. I can take an active part in discussion in familiar contexts, accounting for and sustaining my views.</p>	<p>I can express myself fluently and spontaneously without much obvious searching for expressions. I can use language flexibly and effectively for social and professional purposes. I can formulate ideas and opinions with precision and relate my contribution skilfully to those of other speakers.</p>	<p>I can take part effortlessly in any conversation or discussion and have a good familiarity with idiomatic expressions and colloquialisms. I can express myself fluently and convey finer shades of meaning precisely. If I do have a problem I can backtrack and restructure around the difficulty so smoothly that other people are hardly aware of it.</p>
<p>I can present clear, detailed descriptions on a wide range of subjects related to my field of interest. I can explain a viewpoint on a topical issue giving the advantages and disadvantages of various options.</p>	<p>I can present clear, detailed descriptions of complex subjects integrating sub-themes, developing particular points and rounding off with an appropriate conclusion.</p>	<p>I can present a clear, smoothly flowing description or argument in a style appropriate to the context and with an effective logical structure which helps the recipient to notice and remember significant points.</p>
<p>I can write clear, detailed text on a wide range of subjects related to my interests. I can write an essay or report, passing on information or giving reasons in support of or against a particular point of view. I can write letters highlighting the personal significance of events and experiences.</p>	<p>I can express myself in clear, well-structured text, expressing points of view at some length. I can write about complex subjects in a letter, an essay or a report, underlining what I consider to be the salient issues. I can select style appropriate to the reader in mind.</p>	<p>I can write clear, smoothly flowing text in an appropriate style. I can write complex letters, reports or articles which present a case with an effective logical structure which helps the recipient to notice and remember significant points. I can write summaries and reviews of professional or literary works.</p>

外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定に関する検討会議

平成24年7月19日
初等中等教育局長決定

1. 設置の趣旨

現在、外国語教育の分野においては、「言語を用いて何ができるか」(CAN-DO)という観点から、到達目標や評価に関する様々な取組が行われている。平成23年6月に「外国語能力の向上に関する検討会」(平成22年11月5日初等中等教育局長決定)がとりまとめた「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」においても、国として、学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定することに向けて検討を行うこととともに、各中・高等学校は学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で具体的に設定することについて提言がなされたところである。本提言では、学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定することにより、学習指導要領の内容を踏まえた指導方法・評価方法の工夫・改善を行うことや、グローバル社会に通用するより高度な英語力の習得を目指すことのほか、小・中・高等学校が連携した外国語教育の実現が可能になるとされている。

これらを踏まえ、国及び学校が学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定することに向けて検討を行い、今後の施策に反映させるため、「外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定に関する検討会議」(以下、「検討会議」とする)を設置する。

2. 検討事項

- (1) 中・高等学校で学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定する際の手引きの作成について
- (2) 国として学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で設定することについて

3. 実施方法

- (1) 別紙の有識者の協力を得て、「2. 検討事項」に掲げる事項について検討を行う。
- (2) 必要に応じて、別紙以外の関係者にも協力を求めることができる。
- (3) 必要に応じて、小委員会を設置して検討を行うことができるものとする。

4. 実施期間

検討会議は、「2. 検討事項」に係る検討が終了したときに廃止する。

5. その他

- (1) この検討会議に関する庶務は、初等中等教育局国際教育課において行う。
- (2) その他会議の運営に関する事項は、必要に応じ検討会議に諮って定める。

外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での
学習到達目標設定に関する検討会議委員

【50音順】

【委員】

尾関直子	明治大学大学院国際日本学研究科教授
佐久間康之	福島大学人間発達文化学類教授
高田智子	明海大学外国語学部英米語学科准教授
投野由紀夫	東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
長沼君主	東京外国語大学世界言語社会教育センター専任講師
根岸雅史	東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
本多敏幸	東京都千代田区立九段中等教育学校教諭
松尾美幸	岩手県立福岡高等学校教諭
松本 茂	立教大学経営学部国際経営学科教授
吉田研作	上智大学教授
渡邊英裕	山梨県教育庁高校教育課主査・指導主事

【オブザーバー】

公益財団法人 日本英語検定協会

ブリティッシュ・カウンシル

株式会社 ベネッセコーポレーション